



林知己夫先生を偲んで

- 分類からデータ科学に向けて -

大隅 昇

林知己夫先生が、昨年の酷暑の中、8月6日早朝、心不全のためにご逝去された。行年84才であった。先生は卓越した科学観を持った希有な方であり、また常に我々を導いてくれる道しるべでもあった。この混沌とした時代にあって、研究分野にかぎらず、あらゆる場面で羅針盤となっていていただくべき偉大な星を失ったことは、誠に無念としかいいようがない。

先生のご葬儀（告別式）は、昨年8月11日に執り行われ、800名近くの参列の方々に見送られ、茶毘に付された。また、昨年末、12月2日には「林知己夫先生を偲ぶ会」が、ホテルオークラで開催された。偲ぶ会では、先生のご生前のご活躍、多彩なご交際を反映して、様々な分野から多数の方々のご出席され（約270名）、先生の思い出などが語られた。

断るまでもなく、本学会と林先生とは密接な関係にある。林先生は常日頃から「分類こそが科学的思考の基本的な操作である」「分類は科学の本質に直結する問題であり課題である」と主張され、また、欧米の研究動向にも絶えず気配りをされてきた。とくに、数値分類（numerical taxonomy）、クラスター化法（clustering）、あるいは広く自動分類（automatic classification）の諸方法論には早くから注目され、研究課題の重要な核となりうると常々指摘され、またご自分のご著書の中にも、早くから数値分類の方法論を用いるなどされてきた。とくに、1960年代後半に登場した数値分類の当時の旗頭であったSokal氏とは、早くから研究交流を続けられ、その分野の研究をいち早く紹介もされてきた。このようなことをきっかけに、欧米（とくに北米、英国）の分類学会との絆を作られた。一方、欧州圏、とくに仏国の研究者グループとは、数量化法の研究に関連して1970年代後半から研究交流を続けられ、日本学術振興会（JSPS）、フランス国立科学研究センター（CNRS）等の支援を受けて、両国間の研究交流、例えば日仏科学協力セミナーや両国間の研究者交流などに精力的に関わってこられた（[2]参照）。

実は、こうした学界活動を進める一方、分類学研究の組織化に向けてのプランも着々と進められた。

目次

・巻頭言「林知己夫先生を偲んで - 分類からデータ科学に向けて -」.....大隅 昇	1
・総会記録	2
・運営委員会記録	4
・幹事会記録	5
・IFCS（国際分類学会連合）関連	8
・シンポジウム記録	10
・関連学会活動	10
・日本学術会議報告	11
・国際会議開催情報	12
・事務局から	13

とくに、1970年代前後から欧米諸国に次々と誕生した分類学会と接触をはかり、国内での学会創設に向けての準備を進められた。例えば、フランス・ベルギーに誕生したフランス語圏分類学会〔SFC: Société Francophone de Classification〕の当時の主要メンバー（M. Janbu氏、E. Diday氏他）と密な情報交換をすすめ、我々を叱咤激励しながら、日本国内での学会創設にむけての基礎固めの中心的役割を果たされた。こうした努力により、1983年（昭和58年）6月に、本学会の前身である「分類の理論と応用に関する研究会」が発足し、1991年（平成3年）に「日本分類学会」となり、現在に至っている。また、林先生は、研究会発足時を含め、本学会の会長を何度も務められ、現在ある本学会の礎を築かれた（創設時～1986年/昭和61年、1991年/平成3～1992年/4年、1995年/平成7～1998年/10年）。

本学会は規模こそ小さいが、その源流には、国際的に開かれた研究交流関係の維持こそが重要との林先生の日頃の主張があり、それを具体的に実現する方向での活動が続けられてきた。例えば、各国の分類学会の連合組織化に向けて、ドイツ、英国、北米（カナダ、米国）、イタリア、フランス等々のメンバーとの根気ある調整を進め、国際分類学会連合（IFCS: International Federation of Classification Societies）の創設に高く寄与された。とくにドイツ分類学会（GfKI: Gesellschaft für Klassifikation）のBock氏（アーヘン工科大学）とは密接な交流を続けられ、IFCS国際研究集会第1回大会/IFCS-1987（アーヘン）の開催が実現した。その後、第5回IFCS大会、IFCS-1996を日本（神戸）で開催することとなり、先生は大会組織委員長として、この大会を従来大会

にもまして盛大に執り行い成功裡に導いたことは会員各位の知るところであろう。

とくに神戸大会時に、林先生はその基調講演の中で、「分類の概念」の重要性を指摘するとともに、国際的にはこの場で始めて、この頃に精力的に主張を始めておられた「データの科学」(data science)の基本思想を話され、以後亡くなられるまで、データ解析の発展型としての「データの科学」を主張されるのである。

その後、IFCS会長を務められ(1998年1月～1999年12月)、任期の前後にかけて、Bock氏他と協力の下に、いわゆる「若手研究者旅費支援制度、TAP: Travel Award Program」の創設に尽力され、またこのTAP運営委員会の委員長も務められた。TAPとは、IFCS国際研究集会に参加を希望する若手研究者の旅費の一部を支援する制度で、IFCS-1998、ローマ大会からこの制度が適用され、その後多くの研究者がこれの恩恵に与っている。また、本学会からもIFCS大会時には必ず1名のTAP受賞者を出してきた。

周知のごとく、ここで述べたことは、先生のご生前の長い年月の中での広範囲にわたる精力的なご研究、学会・学界活動のほんの一部にすぎない。限られた紙面の中で先生のお仕事のすべてを論じることは難しく、私自身が先生とのつながりの中で見聞きしてきたことの一部に過ぎない。これも断片に過ぎないが、【参考】として文末に追悼文のいくつかをあげたので、併せてご覧いただきたい。

ここ数年、科学の諸分野の研究のありようや、研究機関、大学その他、研究や教育の場となる諸機関のあり方について広く見直しが問われ、混沌と模索の中に研究環境も大きく変わろうとしている。こうした深刻な危機の時代にありながら、我々はともするとその目標とすべきもの、進むべき方向を見失いがちである。こうしたときにこそ、優れた科学観と豊富な経験を持ち、また先見性のある真の科学者を必要とする。我々の研究分野の象徴的な存在であっ



京極純一先生の弔辞(告別式)

た林先生を失ったことは返す返すも無念でならない。しかし、このことに落胆するばかりでなく、先生のご意思を継承して、さらなる新たな世界への展望を開くことこそが、亡き先生が望まれることと信じて疑わない。

先生の永年にわたる偉大な業績に対して、1981年(昭和56年)に紫綬褒賞、1989年(平成元年)に勲二等瑞宝章を授与され、また没後、正四位を叙された。先生のご戒名は、ご遺族のご意向により、先生のお名前から「知」の一字、統計学から「統」の一字、そしてこよなく愛された音楽から「音」の一字をとり「德音院統慧知昭居士」となった(統慧は統計とも読める)。また、四十九日法要のあと、先生ご自身が30年前に「俱會一處」(“くえいっしょ”と読む)と書かれた墓石碑のもとに納骨され、永い眠りにつかれた。

終わりに、あらためて、先生のご遺徳を偲び、ここに衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。合掌

【参考】

- [1] 飽戸 弘(2002): 林知己夫先生が残されたもの、マーケティング・リサーチャー、No.93、2002、38-40(日本マーケティング・リサーチ協会機関誌)。
- [2] 大隅 昇(2002): 林知己夫先生と多次元データ解析 - 数量化法、データ解析、そして分類からデータの科学へ -、マーケティング・リサーチャー、No.93、2002、41-45(日本マーケティング・リサーチ協会機関誌)。
- [3] Noboru Ohsumi(2002): Professor Chikio Hayashi and Multidimensional Data Analysis - Quantification Methods and Data Analysis, from Classification to Data Science-, IFCS Newsletter Issue 24.
- [4] David Banks: Professor Hayashi eulogy, IFCS Newsletter Issue 24.

(日本分類学会、会長; 統計数理研究所)



「林知己夫先生を偲ぶ会」の様子

訃報

平成14年12月24日、奥野忠一先生がご逝去されました。

先生は、分類学会設立時の発起人の一人であり、また運営委員、会計監事などをお願いしたことがあり、分類学会のためにご尽力をいただいております。まことに残念なことです。先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

ご葬儀（告別式）は平成14年12月27日にとりおこなわれ、日本分類学会として生花をお供えいたしました。

総会記録

平成14年度総会議事録

日時：平成14年9月11日（水）11：00 - 11：30

場所：多摩大学ルネッサンスセンター

出席者9名、委任状46名

1. 会長挨拶

元会長・現運営委員の林知己夫先生が平成14年8月6日逝去された旨の報告があった。

8月10日通夜、11日告別式にとり行われたご葬儀に分類学会から生花をお供えした。また、IFCS Newsletterおよび会報に追悼文を掲載することなど、分類学会として追悼の企画をしたいとの提案があった。

2. 議長選出

立浪忍氏（聖マリアンナ医科大学）を議長に選出した。

3. 平成13年度事業報告ならびに決算報告

下記3.1、3.2の事項を林幹事長より説明した。

大隅会長より、統計関連学会連合大会連絡委員会について、平成14年9月11日開催のシンポジウムが連合大会とのコラボレーションであることを補足し、経緯は会報に掲載するとの説明があった。決算報告については、上田会計監事より補足説明があった。

いずれの事項も全会一致で承認された。

3.1 平成13年度事業報告

1) 第17回通常総会の開催

平成13年12月22日（土）統計数理研究所にて、出席者18名、委任状43名

2) 第18回研究報告会の開催

平成13年12月22日（土）統計数理研究所にて特別講演「シンボリック・データ解析」

市野 学「A Region-Based Fuzzy Pattern Classifier for Symbolic Data」

清水 信夫「SODAS: Symbolic Official Data Analysis System - シンボリック・データ解析のためのソフトウェア - 」

一般発表 12件

出席者：会員29名、非会員20名

3) 会報の発行

・JCS会報第24号の発行

・IFCS Newsletter No.21、22の印刷、配布

4) 運営委員会の開催

電子メールなどの電子メディアを活用した打ち合わせ

・総会・研究報告会開催、シンポジウム開催の検討及び統計関連学会大会連絡委員会への参加について（平成13年6月）

・チュートリアルセミナーの共催（平成13年9月）

・総会議題（平成13年12月）

5) 幹事会の開催

電子メールなどの電子メディアを活用した打ち合わせ

・平成13・14年度役員選挙

・平成13年度年次計画

(1) 総会および研究報告会開催

(2) シンポジウムの開催

・平成12年度会計監査

・統計関連学会連合大会連絡委員会の設置に伴う分類学会の参加について

・チュートリアルセミナーの共催（シンポジウム開催の計画を変更）

・会報発行

6) 統計関連学会連合大会連絡委員会への参加

日本分類学会は、平成14年度の連合大会（9月開催）そのものには参加しないが、何らかの形で参加することで協力することとし、連合大会連絡委員会（第2回）及び数回の連合大会実行委員会会議に、会長または幹事長が出席した。

7) Webサーバーの運営

広報担当幹事が担当し、学会活動報告、計画を掲載した。

8) 国際分類学会（IFCS）への協力
分担金を負担した。

9) IFCS若手研究者向け旅費給付補助（TAP）の公募

1名の申請があり、審査の上申請者の清水信夫会員（統計数理研究所）に決定した。

3.2 平成13年度決算報告

会計幹事の方2名の監査結果を頂いた旨を事務局より説明した。また、上田会計監事より補足説明があった。

4. 平成14年度事業計画ならびに予算

下記4.1、4.2について、林幹事長より説明した。あわせて、会報26号も今年度に発行する見込みで、林知己夫先生の追悼文を掲載する予定であること、IFCSの分担金は2003年度分から2年単位で送金して手数料の削減を図るとの補足があった。

大隅会長から、運営委員会と幹事会はメールで開催して議論の場が少ないが、いろいろ意見を出してほしいとのお願いがあった。また、IFCSの分担金については、IFCS側の事務手続きなどに問題があるので、今後議論になるかもしれないとの補足説明があった。さらに、IFCS TAPは今まで林知己夫先生と大隅会長が資金の調達をしていた（JCSとは別会計）ので、今後、TAP制度存続のため、国内外への寄付の呼びかけを会員にもお願いしたいとの発言があった。

いずれの事項も全会一致で承認された。

4.1 平成14年度事業計画

1) 第18回通常総会の開催

平成14年9月11日（水）、多摩大学ルネッサンスセンターにて

2) 第19回研究報告会の開催

平成14年12月あるいは平成15年3月、統計数理研究所にて（予定）

3) シンポジウムの開催（日本行動計量学会との共催）

9月11日（水）、「テキスト型データの解析を巡って」、多摩大学ルネッサンスセンター

4) 平成15・16年度役員選挙

5) 会報の発行

- ・JCS会報 No.25の発行
- ・IFCS Newsletter No.23、24の印刷、配布

6) 運営委員会の開催

郵便、電子メールなどを用いて開催する。

7) 幹事会の開催

電子メールにより、必要に応じて連絡をとり、審議する。

8) Webサーバー関係

広報担当幹事が担当して、学会活動の報告、計画を掲載する。

9) 国際分類学会（IFCS）に協力

分担金を負担する。

10) 他学会との交流

- ・統計関連学会連合大会との関連

連絡委員会、大会実行委員会に参加する。

連合大会協賛、シンポジウムの連合大会翌日開催

- ・その他、要請のあった諸研究会・シンポジウムなど協賛する。

4.2 平成14年度予算案

別紙の予算案を参照。

5. 新入会員、退会者報告

平成14年度退会者3名。

この件について、林幹事長、大隅会長から、会員数の増減のない状態が続いているので、国際会議の利点などをアピールして、入会勧誘の呼びかけを強化したいとの意見があった。

6. 今後の学会運営について

1) 統計関連学会連合大会連絡委員会など、他学会との協力の推進

連絡会議事録の報告を踏まえて、平成15年度の大会をどう協調するかを検討。

2) シンポジウムなどの共催

3) 学会事務の整理

入会申込書、設立趣意書の更新

4) その他

今後の学会運営、その他の事項について、林幹事長から説明があり、さらに、会報の電子化について提案があった。

大隅会長からは、統計関連学会連合大会連絡委員会は、名称を「統計関連学会連絡委員会」に統一されたこと、平成15年度は、平成14年度と同じ3学会（日本統計学会、応用統計学会、日本計量生物学会）が名古屋地区で連合大会を実施し、日本行動計量学会は連合大会と同時期・同地域で開催予定、分類学会は協賛の予定との補足説明があった。また、連合大会の参加費について、現状では、3学会の会員以外は、協賛学会の会員であっても非会員扱いとなっているが、参加費割引などの協賛するメリットを考慮してほしいとの意見が出席者からあり、この件は、大隅会長が連絡委員会で提案することになった。

会報の電子化については、他学会の実施状況を参考に、コスト面、利便性、速報性について前向きに検討したいとの意見で一致し、幹事会で検討を進めることとした。

運営委員会記録

平成13・14年度第5回運営委員会

日時：平成14年6月25日

場所：書面による

出席者（回答者）：大隅 昇、岡太彬訓、後藤昌司、杉山明子、高倉節子、田中 豊、土屋隆裕、土井聖陽、林 篤裕、林 文、水田正弘、村上征勝、村田磨理子、矢島敬二

次の議題について、賛成14名で承認された。

議題：ISMシンポジウム「環境科学と統計科学の新たな融合」(2002年8月19日、20日、於：統計数理研究所・講堂、主催：統計数理研究所)の協賛団体となることについて

平成13・14年第6回運営委員会

日時：平成14年7月31日

場所：書面による

出席者（回答者）：大隅 昇、岡太彬訓、後藤昌司、杉山明子、高倉節子、垂水共之、土屋隆裕、土井聖陽、林 篤裕、林 文、水田正弘、村上征勝、村田磨理子、矢島敬二、吉野諒三

次の議題について、1、2については賛成15名、3については賛成14名、反対1名で承認された。3については、名古屋地区での開催は会場費がかかる、東京でのシンポジウム同時開催は不便で会員のメリットが少ない、他学会の動向を見て柔軟に対応すべきなどの意見があった。

議題

1. 「地球規模生物多様性情報機構（GBIF）への情報提供について」(ホームページのリンクの許諾を求めるものです)
2. 「国立国会図書館のインターネット資源選択的蓄積実験事業への協力」(自動収集ソフトウェアによる「日本分類学会会報」の収集への

協力依頼です)

3. 「統計関連学会連合大会連絡委員会への協力」依頼 (2003年度連合大会開催(名古屋地区)への賛同、同時開催等の何らかの形での協力依頼)

平成13・14年第7回運営委員会

日時：平成14年9月4日

場所：書面による

出席者（回答者）：大隅 昇、岡太彬訓、後藤昌司、杉山明子、高倉節子、田中 豊、土屋隆裕、土井聖陽、林 篤弘、林 文、村田磨理子、矢島敬二、吉野諒三

次の議題について、賛成13名で承認された。

議題：平成14年度通常総会議題について

幹事会記録

平成13・14年度幹事会報告

各運営委員会、総会前の会議および随時電子メール、電話等により打ち合わせを行った。

1. 平成13・14年度運営委員会開催
2. 平成14年度年次計画
 - (1) 総会およびシンポジウム開催
 - (2) 研究報告会開催
3. 平成13年度会計監査
4. 統計関連学会連合大会連絡委員会の設置に伴う分類学会の参加について
5. 会報発行
6. 平成15・16年度役員選挙

平成13年度決算書

平成14年3月31日現在

収入の部

科 目	細 目	予算額(単位円)	決算額(単位円)
前年度繰入金		307,373	307,373
会費収入	小計	602,000	561,000
	平成13年度分正会員	(324,000)	(330,000)
	平成13年度分賛助会員	(120,000)	(60,000)
	平成12年度分までの未納入分	(108,000)	(161,000)
	新入会員	(30,000)	(6,000)
	入会費	(20,000)	(4,000)
雑収入	小計	95,000	72,070
	予稿集売り上げ	(10,000)	0
	大会・シンポジウム参加費(含報告書代金)	(60,000)	(72,000)
	広告掲載料	(25,000)	0
	利息・その他		(70)
計		1,004,373	940,443

支出の部

科 目	細 目	予算額 (単位円)	決算額 (単位円)
経常運営関係費	小計	260,000	208,425
	会報印刷代 (JCS会報)	(160,000)	(132,300)
	会報印刷代 (IFCS会報)	(70,000)	(76,125)
	連絡用印刷代 (葉書等)	(30,000)	0
大会開催費 (シンポジウム含)	小計	170,000	181,058
	報告集印刷代	(150,000)	(163,800)
	開催費 (茶菓子等、礼金)	(20,000)	(17,258)
事務費	小計	135,000	55,118
	人件費 (交通費含)	(120,000)	(48,800)
	事務用品費	(15,000)	(6,318)
通信郵送費	小計	180,000	107,700
	会報送料	(80,000)	(58,200)
	会誌等送料	(60,000)	(49,500)
	切手、その他	(40,000)	0
IFCS運営分担金		30,000	26,370
予備費		229,373	0
計		1,004,373	578,671

収支差額

収入 (940,443) - 支出 (578,671) = 差額 (361,772)

差額内訳

361,772円

(銀行口座 329,722円)

(郵便振替口座 500円)

(現金 31,550円)

この差額を次年度繰越金とする。

監査の結果、上記の通り相違ないことを証します。

平成14年6月2日

上田 尚一 (印)

吉野 諒三 (印)

平成14年度予算書（案）

収入の部

科 目	細 目	予算額（単位円）
前年度繰越金		361,772
会費収入		602,000
	平成14年度分正会員	(324,000)
	平成14年度分賛助会員	(120,000)
	平成13年度までの未納金	(108,000)
	新入会員	(30,000)
	新入会員 入会金	(20,000)
雑収入		295,000
	予稿集売り上げ	(30,000)
	研究報告会参加費 (報告集代金を含む)	(60,000)
	シンポジウム参加費 (資料代金を含む)	(180,000)
	その他 広告掲載料	(25,000)
計		1,258,772

(注) 会費収入は次のようにして算出した(平成14年4月1日現在)。

平成13年度分会費

正会員 180人×3,000円×0.6= 324,000円

賛助会員 4口×30,000円= 120,000円

未納会費

平成13年度までの未納分(延べ人数)

正会員 180人×3,000円×0.2= 108,000円

新入会員

入会費 10人×2,000円= 20,000円

年会費 10人×3,000円= 30,000円

支出の部

科 目	細 目	予算額（単位円）
経常運営関係費		430,000
	会報印刷代(JCS会報)	(270,000)
	会報印刷代(IFCS会報)	(100,000)
	連絡用印刷費(葉書等)	(60,000)
大会開催費(研究報告会 共催シンポジウムを含む)		390,000
	研究報告会報告集印刷代等	(150,000)
	シンポジウム資料印刷代	(150,000)
	開催費(茶菓子等)	(50,000)
	共催シンポジウム発表者謝金	(40,000)
事務費		155,000
	人件費(交通費含)	(140,000)
	事務用品費	(15,000)
通信郵送費		170,000
	会報送料	(60,000)
	会費請求等連絡通信費	(50,000)
	切手、その他	(60,000)
IFCS運営分担金		30,000
予備費*		83,772
計		1,258,772

* 林知己夫先生ご葬儀生花代は予備費より支出

IFCS (国際分類学会連合) 関連

IFCS-2002大会報告 「IFCS参加報告」

市野 学

フランス、ポーランド、イタリアと、ヨーロッパの強豪が次々と破れる中、伝統国ブラジルが、ドイツをくだして優勝した2002年FIFAワールドカップ。第8回目のIFCS-2002は、韓国・日本での大歓声の余韻冷めやまぬ7月16~19日、日本がグループリーグで対戦したポーランドの古都、Cracowにおいて開催された。

成田からの直行便がないため、ウィーンに1泊して、日曜日の7月14日、Cracowに入った。到着早々に、雷雨の歓迎を受けた。視界数メートルの豪雨の中、猛スピードで飛ばすタクシーには、正直、肝を冷やした。私の宿泊したホテルIBISは、IFCSの会場であるCracow University of Economicsから、徒歩で10分程の距離である。翌15日に、同じ会場で、Symbolic Data Analysisのワークショップが開催される予定。発表するパワーポイント・ファイルの確認をして、まずはビール。一息ついたところで、偶然にパリ大学のE. Diday 教授を見かける。同じホテルに宿泊されているとのこと。「ちょっと見てくれよ」と、フロントに隣接した、オフィスに連れて行かれる。教授は、ご自分のノート・パソコンを、うっかり落としてしまったとのこと。液晶ディスプレイには、見事なピカソの絵(?)が映し出され、完全にお手上げ状態。オフィスのCRTディスプレイに接続して、ワークショップとIFCSの準備を不便そうに進めておられた。何ともお気の毒な話。

15日は、良く晴れた、暑く、長い一日であった。まず、Diday教授がSymbolic Data Analysis (SDA) の最近の話題について発表し、引き続いて12件の一般発表が行われた。ワークショップ最後のラウンド・テーブルでは、アーヘン大学のHans Bock教授が司会をされ、Diday教授、イタリアのC. Lauro教授、ベルギーのM. Noirhomme教授等が、それぞれの立場からSDAについて語り、議論が行われた。まとめれば、「EUの援助でSODASやASSOプロジェクトが立ち上げられ、具体的なオフィシャル・データへの適用事例が出てきている。しかし、今までの方法論と比較して、SDAにどのような強みがあるのか明確でない。客観的な、ベンチマークの方法論を確立すべきである」といった反省が中心であった。ワークショップのより詳しい内容は、IFCS-2002のホーム・ページ<http://ifcs2002.ae.krakow.pl/>からも辿ることが可能。

さて、7月16日午前9時、IFCS-2002のオープニ

ング・セレモニーがスタート。執行部の挨拶、来賓の歓迎の詞、Lauro教授へのメダル授与、さらにTAP賞の授与など、Cracow大学のSokolowski教授の司会で、手際良く進められた。コーヒー・ブレイクの後、Bock教授のKeynote Lecture: Clustering Methodsがあり、引き続いてパラレルでの招待講演、さらに5つのセッションに分かれての発表へと続く。この夜、私は参加しなかったが、Cracow Town Hallでレセプションがあった。

7月17日、ベルギーのRasson教授の招待講演Diverse Classification and Segmentation Trees with the Poisson Processes Hypothesisに参加。引き続きClassification and Regression Treesのセッションへ。この後、Cracowから車で約1時間半、Auschwitzへのexcursionに参加した。女性ガイドの独特な雰囲気の話りもあって、感慨無量。他のexcursionとして、WieliczkaのSalt Mineがあった。

7月18日、スイスのF. Hampel教授のKeynote Lecture: Some Thoughts about Classificationを受講。引き続き、SDAのセッションへ。コーヒー・ブレイクの時、マサチューセッツ大学のMelvin F. Janowitz教授にお会いした。心臓のバイパス手術を、何と5カ所もされたとのこと。まさに奇跡の生還であるが、教授らしく人ごとのお話されていた。いつも陽気なFred R. McMorris教授も一緒に、今回のIFCSがシカゴで開催されることになったことをお話されていた。この日、大型バス3台を連ねCracowから25km離れた丘陵のレストラン、Falwark Zalesieへ移動し、Conference Dinner。民族服を着た男女の歌と踊りで盛り上がった。「月曜日にお風呂を焚いて・・・」の曲で、土地柄を推察可能であろうか。深夜の帰路となった。翌朝会議プログラムを残して、ウィーンへ発つ。

私は約一週間、久しぶりに雑事から解放され、充実感に浸ることができた。一方、ごらんのごとく大変自己中心の報告となったことをお詫びしたい。プログラムによると、発表総計145件で、うち8件が日本からの参加であった。また、約50編の論文は、SpringerからClassification, Clustering and Data Analysisとして、出版されている。林先生、大隅先生、田中先生といったIFCS常連の先生方が欠席されたため、しばしば「どうされている?お元気か?」と尋ねられた。後日、林先生の訃報を知ることとなった。

偉大な足跡を残された林先生のご冥福をお祈りしつつ、報告の終わりとしたい。

(市野学、東京電機大学理工学部、教授)

「IFCS-2002ポーランド大会TAP受賞報告」

清水 信夫

今年7月中旬にポーランドの古都クラクフで行われたIFCS-2002に、私はTAP (Travel Award Program) による旅費給付補助を頂き参加することができました。まずは、関係者の方々に御礼申し上げます。

TAPは、若手研究者のIFCS大会への参加を促進する目的で1998年のローマ大会から設けられた制度です。応募資格は(1)大会当時に35歳以下(2)大会に参加予定(3)過去にTAPによる給付を受けていない、の3点でした。日本分類学会への割り当ては1名ということで、これに申請し、幸運にも補助を頂けることになりました。受賞者は私を含めて7名でした。

TAP授賞式はIFCS初日のOpening Sessionの後に開催されました。今回は、各所属学会および受賞者が読み上げられ、それに対して各受賞者が各々に割り当てられた旅費(開催地から遠い日本から参加した私は現金1,100米ドル、欧州各国からの受賞者は800米ドルなどと、地域も考慮されています)同封の封筒を受け取り、後で事務担当者からの要請により受領承諾書へサインするだけの簡単なものでした。

私自身、欧州での学会はIFCSを含めて全くの初参加ということもあり、期待の半面不安な部分も少なからずありましたが、道中に同宿・同便の日本人参加者がいたこともあり、開催地に無事到着できました。ただ、参加登録時に通知された宿泊費が現地通貨のレート変動により大幅に変わっていたことなど、日本では考えられないような事態がいくつかあったことにお国柄の違いを感じさせられました。

大会では、各種クラスタリング・分類手法に関連した発表が理論から応用に至るまで幅広くなされていました。その中でも、Web MiningやSymbolic Data Analysisに関する各種発表、ドイツのBock教授による基調講演などが私には強く印象に残りました。また、各種発表・講演の他に、今大会でも市内や近郊へのツアー(目的地はいずれもユネスコの世界遺産に登録済み)が企画されており、そのうち私はアウシュビッツに行ってきました。第2次世界大戦の悲劇を生々しく伝える数々の資料に圧倒されたひとときでした。他にヴィエリチカ岩塩採掘場や旧市街へのツアーも企画され、それらも概ね盛況だったようです。

大会最終日には、閉会式において次回2004年大会の米国シカゴでの開催が宣言されました。私は閉会式終了後に旧市街散策を楽しみ、ポーランド料理に舌鼓を打ちました。その翌日にクラクフを発ち、約16時間かけて帰国しましたが、初の欧州旅行で盗難・事故・事件などのトラブルに巻き込まれなかったことが私としては何より幸いでした。

現時点でTAP制度が今後も実施されるかどうか、また実施されたとして支給額がいくらになるかはいずれも不明ですが、極めて幅広い内容の発表・講演がなされている有意義な大会であったという感じを受けただけに、資格のある方の応募・参加をお勧め致します。

(清水信夫、統計数理研究所、助手)



TAP授賞式



会場前景

写真提供：柳貴久男(岡山理科大学)

清水信夫(統計数理研究所)

シンポジウム記録

第18回シンポジウム

- テキスト型データの解析を巡って -

日 時：2002年9月11日（水）13：00～17：00

会 場：多摩大学ルネッサンスセンター

出席者：会員13名、非会員125名

共催：日本分類学会、日本行動計量学会

協賛：多摩大学、統計関連学会連合大会

プログラム

- (0) シンポジウムの開催主旨と総論
大隅 昇（統計数理研究所）
- (1) Survey Analyzer、WordMinerを用いての比較分析
渡會 隆、小山 裕之（東京サーベイリサーチ）
- (2) DE-FACTOによるデータ分析の考え方とその特徴
中田 晃、五十峰 正貴（電通リサーチ）
- (3) TRUE TELLERによる構文解析を用いたテキストマイニング
三室 克哉（野村総合研究所）
高井 貞治（TSコミュニケーションズ）
- (4) WordMinerによる探索的なテキスト型データのマイニング
保田 明夫（平和情報センター）
- (5) 総合討論
指定討論者によるコメント
木下 富雄（甲子園大学）
村上 征勝（統計数理研究所）
会場参加者との質疑応答

当日の様子



関連学会活動

[統計関連学会連絡委員会]

統計関連学会連合については何度かお知らせしている通りです。日本分類学会も何らかの協力をしていく方針をたてていますが、平成14年10月26日の連絡委員会には、会長、幹事長ともに欠席しました。議事録の要約は以下のとおりです。2003年度の連合大会へは、分類学会としてどのような形で参加するか、今の段階では未定です。

第1回統計関連学会連絡委員会議事録（要約）

- 1 2002年度統計学関連学会連絡委員会の活動経緯、及び、2002年統計関連学会連合大会の決算案などの報告があった。
- 2 2003年度統計関連学会連合大会の組織については、連絡委員会の下に、連合大会の運営、および企画を担当する実行委員会および、企画委員会を置く。さらに、大会受付等の事務作業の為に事務局チームを設ける。各委員会・事務局のメンバーは、日本統計学会、応用統計学会、日本計量生物学会の三学会および開催地の名古屋を中心に組織する。

3. 2003年連合大会では、協賛学会の会員に対しては、参加費を三学会の会員と同じ額とする。
以上。

【その他】

各学会の活動状況は、ホームページをご覧ください。

日本統計学会

<http://www.jss.gr.jp/>

応用統計学会

<http://www.applstat.gr.jp/>

日本計算機統計学会

<http://www.jscs.or.jp/>

日本行動計量学会

<http://www.soc.nii.ac.jp/bsj/>

日本計量生物学会

<http://www.soc.nii.ac.jp/jbs/>

日本学術会議報告

2002年7月と10月に、日本学術会議第4部会員、統計学研究連絡委員会（統計研連）委員長吉村功先生からお寄せいただいた報告をそのまま掲載いたします。文中の所属や肩書きなどは当時のものです。

（1）2002年7月20日付記事

4月16～19日にかけて、総会が開かれました。主要議題は、「日本の計画」の案文作成、日本学術会議の自己改革、自己評価でした。議論でのやりとりのある種の面白さを別とすれば、統計学関連研究者の方々に報告したくなることはありませんでした。

学術会議に限らないことでちょっと気になったことがあります。自己評価と外部評価の必要性が強調される中で、研究・教育といった本質的なことと別な、事務的な仕事が増えていくことです。たとえば、「研究連絡委員会の自己評価を送ること」という指示があり、後に添える内容の評価書を送らざるを得ませんでした。

これらは委員会の反省材料になりますし、これを公表することでどんなことをしているかが外部から分かります。しかしその内容がそのために費やされる時間と労力に見合うものかどうかを考えると、学術会議などではこんなことをさせないで欲しい、と感じます。いかがでしょうか。

日本学術会議の自己評価

平成14年7月15日

様式2 研究連絡委員会、専門委員会、小委員会

1. 委員会：統計学研究連絡委員会

2. 構成委員数：会員 7名、非会員7名（内訳）
所属：教育・研究専門機関7名（男6、女1）

3. 評価代表者名：吉村 功

4. 委員会今期活動目標：1. 統計学関連学会の協調を強めること 2. 統計科学のフロンティアの拡大 3. 統計学教育の進め方の検討

5. 活動目標を選択した理由について、自由にお書き下さい。：1について：それぞれの歴史的経緯があって作られた統計学関連学会において、近年、医学薬学生物学関連の方法論の構築と応用、官庁統計データの活用、社会科学への統計的方法論の活用、大規模環境データの解析、コンピュータ利用手法など、共通の問題意識のものが多くなっている。そこで学術大会の共同開催、英文学会誌の共通発行、国際連携等で協調を進めることが望ましくなっている。2. 上に例示した共通課題は現在社会が解決を強く求めている課題でもある。そのような課題は統計学のフロンティアを拡大することではじめて解決への道筋が作られるものである。3. 課題が多くあるときにはそれに取り組む人材も多く必要で、それを養成することが必要である。

6. 目標の達成方法について、ご自由にお書き下さい。：最初に委員における討論を行った後、関連学会の責任者（会長等）をオブザーバーとして招き、可能性の検討を行った。さらに、委員のそれぞれの学会での立場に基いて、いくつかの学会間での部分的な協調を進展させるよう働きかけている。

7. 委員会開催回数：5回。ただし、この会合は、全体の対面委員会であり、この間には、メールによる意見交換と委員長・幹事の会合が開かれている。

8. 委員会出席者数（オブザーバー、傍聴者は外数）：第1回 11人（オブザーバー 0人）第2回 9人（オブザーバー 0人）第3回 9人（オブザーバー 0人）第4回 8人（オブザーバー 5人）第5回 9人（オブザーバー 3人）

9. 活動の成果：日本統計学会、日本行動計量生物学会、応用統計学会、日本計量生物学会、日本計算機統計学会、日本分類学会、日本数学会統計数学分科会の学会誌、機関誌等に、日本学術会議での議論を報告した。これらの組織に対して、協調のための企画、たとえば「日本統計科学連合設立趣意書案」等を送り、検討の基盤を用意している。

10. 学・協会との連携：上記各学会といろいろな機会に検討を行っている。

11. 活動の公開状況：日本学術会議報告を総会の

度ごとに各学会に送っている。これらは、各学会の機関誌上に掲載されている。

12. 目標の達成状況：統計学研連の表だった企画というわけではないが、平成14年度には、日本統計学会、応用統計学会、日本計量生物学会の3学会で、年次大会を合同して行うことが実現した。さらに、平成15年度には、日本行動計量学会を含めた4学会の連合大会の試みが検討されている。
13. 目標達成の障害要因について、ご自由にお書き下さい。：統計科学のフロンティアの拡大について、個別の研究としては部分的な発展があるが、統計学研究連絡委員会という形式での企画を組むことには、関連学会の同意が得られていない。統計学教育の方法論については、理数教育一般での困難と同様、学生等の生活経験が乏しくなっていることが大きな原因になっているため、特段の工夫が試みられない状況である。
14. 成果の評価：まだ成果を議論する段階に至っていない。
15. 評価結果に基づく改善案：今後とも課題の達成に努力したい。
16. 所属組織による評価について、ご自由にお書き下さい。：所属組織が何を意味するか不明である。もし、統計学研連を意味するのであれば、期末の委員会で検討する予定である。

(2) 2002年10月27日付記事

1. 改選のこと

学会会議会員は3年が単位で、現在の第18期会員は来年7月までが任期です。改選には、推薦資格のある学会が推薦人と候補者を選びます。締め切りが来年2月ですから、各学会はそれぞれ準備をする必要があります。

ただし、次期については微妙な問題があります。日本政府は、行政改革の一環として、科学面での政策を「総合科学技術会議」に依存して決めることにしていますが、これが現在、学会会議の改革を審議中で、近いうちに今までと違った選考方針を出しそうです。たとえば、ある期の学会会議会員はその前期の会員が指名する、といったような変更です。こうなると、次期は従来の方針で選んでおいて、その次から新方針を適用するのか、それとも現在の期からその方針を適用するのか、といった過渡期の問題が生じ第19期の会員選考がどうなるか分からないのです。場合によっては、現在の第18期の任期を少しだけ延長して、新体制を作るかもしれません。各学会としては従来通りに推薦の準備をしておくこと、変化が生じ得たらそれに対応できるようにして

おくことが必要になります。

2. 新しい学術体系のこと

吉川弘之会長、吉田民人副会長、黒川清副会長といった学会会議の現執行部は、20世紀の行き詰まりを21世紀において解決するためには新しい学術大系が必要、という認識を持ち、それを高らかにうたう「日本の計画、Japan Perspective」という文書をまとめようとしています。(近く、<http://www.scj.go.jp/>で中間報告が公開されます。)

この報告が机上の作文に終わるか、行政上・学問上に大きな影響を与えるかは予想がつきません。こういう文書に基づいて学術上の開発資金が流れることもあり得ますし、新しい法人や組織が作られることもあり得ます。そういう意味で、自分の分野で研究論文を書いていけばよい、ということではなく外部世界・他の分野ではどんな議論がなされているか、に関心を持ち知識を持っていただきたいと思えます。もちろん、そのようなことに流される必要はありませんが。

3. 統計学関連学会の協調について

統計学研究連絡委員会(統計研連)では、ずっと統計学関連学会の協調についての議論を続けています。たとえば、統計科学連合を作れないか、合同大会を行うのはどうか、英文誌の共同発行はどうか、といったことの議論です。残念ながらその議論はそれほど進んでいません。これに対して、できることから協調の動きを作ろう、ということで日本統計学会、応用統計学会、日本計量生物学会は、連絡委員会を組織して、今年(2002年度)連合大会を開催しました。この3学会は日本分類学会の協賛も得て、来年名古屋で連合大会を開きます。そこでは日本行動計量学会とのほぼ同時期の開催を計画しています。このような動きと、統計研連の協調の努力はどのような関係なのか、という質問が出ています。それに対して私は、統計研連はトップダウン的、連絡委員会はボトムアップ的統治外があるだけで、同じ方向を目指したものである、と答えています。欧文誌の共同発行については、統計研連で呼びかけた方がよい、というのが9月30日に開かれた統計研連の委員会の結論ですので、私としてはそういう呼びかけをする予定です。

以上が現状報告です。

国際会議開催情報

ISIのWebサイトに最新の国際会議情報が掲載されています。詳しくは、

<http://www.cbs.nl/isi/calendar.htm>
を参照ください。

事務局から

研究報告会のお知らせ

先にご案内をお送りしたとおり、第19回研究報告会は、平成15年3月28日に開催を予定しています。プログラム等の詳細は、ホームページに順次掲載していきます。

日本分類学会ホームページ

ホームページのURLは、<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jcs/>です。研究会の予定などの掲載情報を広く募集しております。詳しくは事務局までご連絡ください。

報告集の頒布

シンポジウム、研究報告会の報告集は若干の在庫がありますので、ご入用の方は事務局までお問い合わせください。

会報へ寄稿のお願い

今号に寄稿いただいた皆様には、紙面を借りて、お礼申し上げます。お忙しいところ、ありがとうございました。発行が遅れたことをお詫び申し上げます。

JCS会報では、常時、会員の皆様の寄稿をお願いしております。国内外の学会に参加した際の印象記や研究会の予定など、会員に知らせたいことなど広く募集しております。詳しくは事務局までご連絡ください。電子メールでの寄稿を歓迎します。

会費納入のお願い

会費収入が見込みを下回る年度が続いております。納入へのご協力をお願いいたします。ご不明の点は、学会事務局までお問い合わせください。

IFCS論文集について

IFCS-93、IFCS-96、IFCS-98、IFCS-2000、IFCS-2002大会の論文集が発刊されておりますので、ご関心のある方は出版社までお問い合わせください。

New Approaches in Classification and Data Analysis
(1994)
(Proceedings for the IFCS-93, Paris, 1992.)

Data Science, Classification and Related Methods
(1998)
(Proceedings for the IFCS-96, Kobe, 1996.)

Advances in Data Science and Classification (1998)
(Proceedings for the IFCS-98, Rome, 1998.)

Data Analysis, Classification and Related Methods
(2000)
(Proceedings for the IFCS-2000, Namur, 2000.)

Classification, Clustering, and Data Analysis: Recent
Advances and Applications (2002)
(Proceedings for the IFCS-2002, Cracow, 2002.)

なお、いずれの巻もSpringer-Verlagから出版されております。現時点での価格等につきましては、下記宛にお問い合わせください。

〒113-0033 東京都文京区本郷3-3-13
Springer-Verlag Tokyo (シュプリンガー・フェアラーク東京) 編集企画部まで
E-mail: kambara@svt-eps.co.jp

<学会問い合わせ先>

日本分類学会事務局
〒106-8569 東京都港区南麻布4-6-7
統計数理研究所気付
学会事務担当：林なおみ (毎週月曜のみ)
TEL: 03-5421-8741
FAX: 03-5421-8796 (日本分類学会宛を明記のこと)
E-mail: HQJ11574@nifty.ne.jp (林文、幹事長)
MarikoMURATA@sinfonica.or.jp
(村田磨理子、広報担当幹事)
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jcs/>

社会調査ハンドブック

林 知己夫編

A5判 776頁 本体25000円 (12150-4)

- 理論・方法から各種の具体例まで、社会調査のすべてを集大成した
- 調査の「現場」で役に立つデータ収集・分析の技法を実用的に解説

[内容]社会調査の目的/社会調査の対象の決定/データ獲得法/各種の調査法とそれを行う方法/各種の調査のデザイン/質問・質問票の作り方/調査の実施/データの質の検討/分析に入る前に/分析/データの共同利用/報告書/実際の調査例/付録:調査のための基礎データの獲得法/他

統計科学辞典

B.S.エヴェリット著 清水良一訳

A5判 536頁 本体12000円 (12149-0)

統計を使うすべてのユーザーに向けた「役に立つ」用語辞典。医学統計から社会調査まで、理論・応用の全領域にわたる約3000項目を解説。100人を越える統計学者の簡潔な評伝も収載。【項目例】赤池の情報量規準/鞍点法/EBM/イエイツ/一様分布/移動平均/因子分析/ウィルコクソンの符号付き順位検定/後ろ向き研究/SPSS/F検定/円グラフ/オフセット/カイ2乗統計量/乖離度/カオス/確率化検定/偏り他

多変量解析実例ハンドブック

柳井晴夫・岡太彬訓・繁樹算男・高木廣文・岩崎 学編

A5判 916頁 本体30000円 (12147-4)

できるだけ多くの具体的事例を紹介・解説し、多変量解析のユーザーのために「さまざまな手法を、いろいろな分野で、どのように使ったらよいか」について具体的な指針を示す。【内容】【分野】心理/教育/家政/環境/経済/経営/政治/情報/生物/医学/工学/農学/他。【手法】相関・回帰・判別・因子・主成分分析/クラスター・ロジスティック分析/数量化/共分散構造分析/項目反応理論/多次元尺度構成法/他

シリーズ〈データの科学〉

林 知己夫編集

1. データの科学

林 知己夫著 A5判 144頁 本体2600円 (12724-3)
[内容]科学方法論/データをとること/データを分析すること-質の検討・簡単な統計量分析からデータの構造発見

2. 調査の実際 -不完全なデータから何を読みとるか-

林 文・山岡和枝著 A5判 224頁 本体3500円 (12725-1)
[内容]〈データの獲得〉どう調査するか/質問票/精度。〈データから情報を読みとる〉データの特性に基づいた解析/他

3. 複雑現象を量る -紙リサイクル社会の調査-

羽生和紀・岸野洋久著 A5判 176頁 本体2800円 (12727-8)
[内容]紙リサイクル社会/背景/文献調査/世界のリサイクル/業界紙に見る/関係者に聞く/資源回収と消費/他

4. 心を測る -個と集団の意識の科学-

吉野諒三著 A5判 168頁 本体2800円 (12728-6)
[内容]国際比較調査/標本抽出/調査の実施/調査票の翻訳・再翻訳/分析の実際(方法, 社会調査の危機, 他)/他

5. 文化を計る -文化計量学序説-

村上征勝著 A5判 144頁 本体2800円 (12729-4)
[内容]文化を計る/現象解析のためのデータ/現象理解のためのデータ分析法/文を計る/美を計る/古代を計る/他

—— 続 刊 ——

6. データの科学とデータマイニング 大隅 昇・吉村 宰著

講座〈情報をよむ統計学〉(全9巻)

上田尚一著

1. 統計学の基礎

A5判 224頁 本体3400円 (12771-5)
正しい情報をよみとるために必要な基本概念を詳しく解説

2. 統計学の論理

A5判 240頁 本体3400円 (12772-3)
データ解析の進め方など統計学の種々の手法を広く解説

3. 統計学の数理

A5判 232頁 本体3400円 (12773-1)
回帰分析などの統計学でよく使われる手法を詳しく解説

6. 質的データの解析

A5判 216頁 本体3400円 (12776-6)
世論調査や意識調査などの結果のよみ方に役立つように解説

7. クラスタ分析

A5判 216頁 本体3400円 (12777-4)
データの区分けのために有効な使い方と数学的基礎を解説

9. 統計ソフトUEDAの使い方 [CD-ROM付]

A5判 200頁 本体3400円 (12779-0)
統計手法の「意味」がわかる全巻共通のソフトとその使い方

—— 続 刊 ——

- 4. 統計グラフ
- 8. 主成分分析
- 5. 統計の活用・誤用

朝倉書店

〒162-8707 東京都新宿区新小川町6-29
電話 営業部 (03) 3260-7631 FAX (03) 3260-0180
<http://www.asakura.co.jp> HPで新刊案内メール会員募集中(登録無料)

*本体価格は消費税別です。
(ISBN)は4-254-を省略